

業務資料 № 471

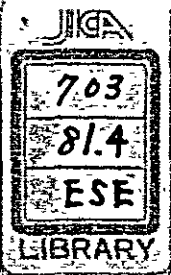
昭和51年度

市場調査報告書

ハワイマモンおよびメロンの輸出可能性

昭和53年3月

国際協力事業団



国際協力事業団

受入 月日 '84. 4. 10	703
登録No. 03185	81.4
	ESE

7030
4650

は し が き

本調査は、当事業団在外支部が管内移住地の主要生産物に関する生産、流通機構等をミクロ的に把握することを目的に実施している市場調査の昭和51年度分として、サンパウロ支部が実施したものである。

国際協力事業団

移住第I業務部長

JICA LIBRARY



1025425[8]

報告書名	市場調査報告書 ハワイマニホエガロアの輸出可能性		
発行年月日	53. 3	提出年月日	53. 5. 12
発行部課	移住計画課		
担当者氏名	原		
<p>1. 一般配布可</p> <p>(2) 取扱い注意(一般配布不可) 但し相互交換のため下記機関への配布をしてよい 場合は、当該機関の番号に○印を付ける事。</p> <p>〔備考〕</p>			
〔資料交換対象機関〕			
1. アジア経済研究所	5. 日本輸出入銀行		
2. 国立国会図書館	6. 世界銀行		
3. 経済協力基金	7. 社団法人 政府資料普及調査会		
4. 日本貿易振興会			

目 次

I 緒 言	1
II 黄色スペインメロンの輸出可能性について	2
1. 概 要	2
2. 年間生産量	3
3. 価格変動	4
4. 輸出可能性	5
III マモン（ハワイ種）の輸出可能性について.....	8
1. 概 要	8
2. 年間生産量	8
3. 価格変動	10
4. 輸出可能性	10

I 緒 言

1. 調査の目的

マモンハワイ種およびスペインメロンの生産は、近年ブラジル国内市場において注目を集めているが、その生産の増加と共に、近い将来販路拡張が必要となってくると思われる。そこでこれらの海外市場進出可能性を調査し、関係移住地振興の資料に供する。

2. 調査員

サンパウロ支部

なお、本調査は、コチア果樹蔬菜部長堀野喜彦氏の協力を得て実施したものである。

3. 調査期間

昭和52年3月

4. 調査地

ブラジル

II 黄色スペインメロンの輸出可能性

1. 概 要

ブラジルにおいて近年特に生産、消費が伸びている黄色スペインメロン (Melão Amarelo) は、1969年から急激に市場に出廻り、翌年には従来国内産物市場で優位な座を占めていたバレンシア・ベルデ種 (Varenciano Verde) を追い出しメロン市場を独占するにいたった。

バレンシア・ベルデ種は、1950年初期、バストスの日系農家がスペインよりの輸入果物の種子を取り栽培を始めたと云われている。'50年代後半には、バストス、トッパン方面から2~3万箱がサンパウロ市場に出荷されるようになり、その後生産は、除々に増大し'60年代には、サンパウロ・リオ市場に約9万箱程度の出荷を見るようになった。しかし、国内生産は、この9万箱程度で伸び悩みとなり、需要に追いつかず、従いこの需要不足分を輸入により補充していた。普通、輸入時期は、8~12月にスペイン・ポルトガルより、2~3月にアルゼンチン、チリーより行なわれていた。なお、1975年からは、国産メロンの急増により、輸入は停止している。

国産メロンは、輸入メロンと比較して品質が劣るという事で、通常その価格は、輸入メロンの半値から $\frac{2}{3}$ 程少となっていた。

バレンシア・ベルデ種の流通上の問題点は、果皮が緑色である為、熟期の判定が難しく、しばしば未熟物が市販される場合があつて、消費者が敬遠する傾向にあることであつた。しかし黄色メロン種の場合は、果皮が熟すると黄化する為、未熟物が販売されるケースは、殆んどなく、事実、黄色メロンが市場に出廻ってから、急激に消費量が増大した。また生産者側も、黄色種の方が従来のもよりも高値で販売される為、急突黄色種がバレンシア・ベルデ種にとって変る結果となつた。

さらに黄色種は、熟期判定が容易であるところから、バレンシア・ベルデ種の栽培面積限定要因になっていた収穫期の人夫雇用が可能となり、バレンシア・ベルデ種の家族労力中心の1～2haという栽培面積から、黄色種への移行とともに、30～50haという大規模生産が可能となり、生産量自体も急増するという結果となった。

1976年度の生産量は、サンパウロ州のCEAGESP、その他市場、リオ市場、ベレン市場等の出荷量から推測して約140万箱程度となり、1968年度から比べると17～18倍の生産量となっている。今や、柑橘、バナナ、リンゴ、ブドウに次ぐ主要果樹としての位置を確立している。また、このようにメロン流通量の増大には、'60年代の後半から'70年代にかけてこの道路網整備による流通網の拡大も忘れてはならない主要要因である。現在では、サンパウロ・リオという中央市場に向けてパラ州から多量の出荷がなされており、1971年頃からは、ベルナンブコ州サンフランシスコ河流域からもある程度まとまった生産が行なわれるようになってきている。南バイア州においても1972年頃から生産が始まっている。

2. 年間生産量

前述したごとく、1976年度の黄色メロンの国内総生産量は、約140万箱と推定しえるが、この州別生産量は、次のごとく推測しえる。

サンパウロ州	75万箱
パラ州	25 "
ベルナンブコ州	20 "
バイア州	20 "

また、これら各州の生産時期は、

サンパウロ州	11月～1月	50%
	3月末～6月	50%
パラ州	6月末～10月末	

ベルナンブ、ロ州	8月～11月	
バイア州	2月～3月	多量
	4月～6月	少量

となっている。

このよりの生産に対する消費市場は、

サンパウロ市場計		105万箱
CEAGESP	93万箱	
その他	12万箱	
リオ市場計		40万箱
サンパウロからの転送分	20万箱	
リオ直送分	20万箱	
北伯市場		5万箱

とみられている。

3. 価格変動

メロンは、地中海沿岸が原産であり、現在でも、その主要生産地は乾燥地帯に存在する。つまり植物特性として湿害抵抗性の弱い作物であり、ブラジルのようにある程度の降雨量のある地域での生産は、その年の降雨状況により大きな影響を受ける。従って、消費市場がある程度の要求をしている条件下では、価格の年変動も大きくなって来る。これがメロン市場の一つの特性である。

時期変動を見ると、サンパウロ州物が出る11月～1月、4月～5月が普通最安値になる。高値時は、夏期で2月～3月、冬期で6月～8月で、最高値を記録するのは、2月、7月に多い。なお、7月は年間を通じて最も年変動の大きい月である。

4. 輸出可能性

海外市場からの需給バランスと輸送距離の関係からのみ見ると、ヨーロッパおよび冬期アルゼンチンへの輸出は、可能性の強いものと思われる。特に、2月～5月頃のヨーロッパ向け輸出は、かなり、期待しえらるものと思われる。

しかし、現実には輸出具体化の段階になると品質、価格、輸出手段等に阻害要因が存在し、輸出の可能性は極めて薄くなっていく。

この内現在の段階で決定的阻害要因となっているのが品質規格である。メロンは、前述のごとく、乾燥地帯を好む作物で、多少の湿度があっても、生果物の保存性が薄れてくる。この観点から見るとブラジルの現生産地帯には、長期輸送に堪えうるメロンを産出する地帯はなく、輸出可能なメロンを安定供給出来ない状態にある。南バイア州の1月～4月や、サンパウロ州の奥ソコカバナや奥パウリスタの生産期は、乾燥期であるが、それでも多少の降雨を見ることがあり、同一品質物を安定生産することが出来ない。

輸送手段としては、輸出コストから船倉輸送しかないが、船便は時間的確定性が薄く、輸送期間を重視する生果物輸送には元来不向きであるとの問題もある。特に前述のごとく自持ちの悪いブラジル産メロンの場合には、さらにこの船便輸送そのものが阻害要因となってくる。

1975年に一度、30箱のメロンが英国向けに試験輸出されている。結論を先に述べると、船倉輸送の不適當性から輸出見合せの結果となっている。このケースのいきさつを述べると、まず船会社と冷蔵船室の契約を行ない、ある程度の入港の遅延をも見込み、船積み予定の約2週間前から、ペルナンブコ州ペトロリーナより輸出用として厳選されたものを30箱づつ5日ごとに3回にわたりバスターズに向けて送った。結局3回目の出荷分が予定の船の入港に合致したが船積み段階でさらに4日遅れとなり、過熱を心配した結果、ペルナンブコ州産物をサンパウロ州のトッパン物に急遽切

り変え、船積みした。しかし、30%の果実に着荷後萎枯れ病が発生し商品価値を無くしてしまった。このように、生果物の船倉輸出は、確実な船積みが前提となるが、現実には、極めて困難な問題である。また、たとえ船積みに確実性が出て来ても、出荷サイドで、2～3日の連続降雨があると船積み不可能な状態となる。

ブラジルの主要輸出産品であるオレンジの輸出で農産果汁の輸出が年々伸びているのに対して、生果物輸出が年々減少の一途をたどっているという事実も生果物輸出の難しさを物語るものであろう。現在、生果物の輸出には保険制度が無いのが実情で、いづれにしても、生果物の輸出には、穀類輸出とは異ってリスクが大きく、相当な利益の見込める場合でないとなかなか輸出には踏み切れないうであろう。

輸出用メロンの規格に関しても問題がある。ヨーロッパ市場で好まれるメロンは、一般に一果重800gから1,000g程度の小玉で、輸出に際してもこの点が要請事項の一つになるが、ブラジル産物は、普通1,200gから2,000gと大玉で、市場側要請に応じえない。従って栽培品種の検討を必要となってくる。なお、現在メロン輸出に関しては、規格、法令は無く、輸入国側の法令、注文に従って行なえば問題がない。

輸出阻害要因としては、さらに価格という大きな要因がある。輸出を実行するには、国内市場よりも海外市場の方が経済的に有利であるという前提があるのが普通であるが、現段階でのメロン価格は、国内市場での価格の方が、輸入国の希望価格よりも高値を示している。たとえば、英国、ドイツ等では、F.O.B 6ドル～7ドル/箱程度でないと商談成り立たずと主張している。また、経済性については、多少譲歩して、海外市場の確保を第一義とした輸出を考へて見ても、前述したごとくブラジルがメロン栽培の最適地ではないところから、病害防除経費等生産原価が高くなり、利巾が極めて小さいか、または原価割れすら考へられ、生産者側の意志決定は、非常に難しくなるであろう。特に、生産量の多いサンパウロ州をは

じめ、ベルナンブコ州を除く他の生産地域の栽培は、ほとんど日系人の手によっており、自然条件の不利な面を技術でカバーするという集約的栽培であって、多大な労力と経費をかけている。

このように考えて行くと、現在の輸出条件下でのヨーロッパ向け輸出を可能ならしめるには、数多くの困難な阻害要因を打破せねばならないとの結論となる。ただ、アルゼンチン向けの輸出に関しては、ある程度の可能性を持っていると云えよう。

Ⅲ マモン（ハワイ種）の輸出可能性について

1. 概 要

ブラジルにおけるマモンは、その消費量からして極めて重要な果実であり、また、その生産も栽培が比較的容易であるところから、無霜地帯を除いては、規模の大小は別として、あらゆる地域において行なわれている。

しかしながら、その栽培品種の改良は、研究機関等でも殆んど行なわれておらず、また、種苗配布も公的には行なわれてない。種子は自家採種ものの利用が殆んどで、その為、混雑が多く形質は固定していない。

現在ブラジルで市販されている在来種のマモンは、一果重1kg～3kgもあり、ヨーロッパ、アメリカ等で市販されているものに比べ非常に大きく、この種のマモンは海外市場には通用しない。

在来種のマモンの主要な生産地域は、サンパウロ州モンテアルトオ方面であるが、マモンの場合その甘味が温度条件により大きく左右され、サンパウロ州よりもリオ・北伯といった気温の高い地方産のものの方が甘味が強く美味とされている。

ハワイ種のマモンは、パラ州を中心に導入され、1975年からサンパウロ市場に出荷が開始された。このハワイ種マモンは、小型で甘味強く、日持ちが良いため在来種と比べると高級イメージが強く、さらに丁度出荷開始の1975年の大降霜による出荷激減状態によるマモンの市価暴騰ともあいまって、現在では高級果実に位置付けされ取引きされている。

2. 年間生産量

このハワイ種マモン生産の歴史は、前述のごとく極めて新しいのであるが、その市場性から北伯において急激に増加している。主要生産地域は、パラ州のカスタニヤールからサンタイザベルであるが、トメアスー地域の新植も増加して来近日出荷も予定されており、ハワイ種マモンの栽培本数

は、いまや100万本にならんとしている。そして、これらが出荷を開始すれば、現在の約10倍程度が市場に出廻ると見込まれており、1977年後半からそろそろ本格的出荷が始まると予測されている。

サンパウロ市場でハワイ種マモンを取扱っているのは、南伯産組、コチア産組、アチバイエン（個人経営）の3ヶ所であるが、その中で南伯産組が歴史的にも古く、量的にも多い。コチア産組とアチバイエンは、1976年7月から取扱いを開始している。

南伯産組、コチア産組の取扱い量とアチバイエンの取扱い推定量とからサンパウロ市場へのハワイ種マモン（1976年度）入荷量を見ると下表のごとく、ほぼ10万箱程度である。これに生産地場のベレン市場での推定販売量1万～1万5千箱を加算すると、1976年度の生産量は、11万箱程度と推定し得る。

ハワイ種マモンのサンパウロ市場入荷量（推定）

（箱 6kg）

月 別	入 荷 量 箱	平均価格 c.r \$/箱
1976年1月	1,457	80.06
2	2,135	81.64
3	1,501	58.40
4	2,970	65.33
5	3,518	66.77
6	6,333	79.77
7	8,000	79.75
8	8,000	123.87
9	10,000	130.98
10	12,000	146.39
11	15,000	102.76
12	22,000	88.95
1年間合計	92,514	
1977年1月	18,000	72.29
2	10,000	107.44

3. 価格変動

ハワイ種マモンの場合、歴史が浅く年次変動は分析しえないが、時期的変動は、在来種とほぼ同じような変動をしている。高級果実としての取扱いであるので、一定階層以上に消費されるが、桃、ブドウ、スモモ、マンガーデン種等が多量に出廻る12月、1月はやはり価格は落ちる。8月～10月が最も高価の時期である。

4. 輸出可能性

ハワイ種マモンの輸出に関しては、1976年8月、三井物産ベレン支店がドイツのハンブルグにサンライス種の見本を送り、その時点で品質については評価を得ている。また、6kg入りの箱(段ボール箱)で、60 cr\$位は生産者に入るとの回答をも得ている。したがって1977年の大半期生産物から試験輸出が開始されるものと思われる。近々、生産が5倍～10倍へと増加していくことが予想されるが、そうならば、現在の価格を維持することは困難で、国内市場価格の下落は必至と見られており、生産者価格が60～70 cr\$ならば、輸出必要量は、パラ州方面で確保出来ると思われる。

今回見本に出されたサンライス種は、ヨーロッパ市場でも好まれており、また日持ちも良く、さらにブラジル国内市場にも適するところから今後のマモンは、サンライス種を中心に考へて行くべきであろう。ヨーロッパ市場では、小果の方が価格面から購入しやすいという理由で好まれるのに対し、ブラジル市場では大果の方が値の率が良くなるので、500g～800g位までを国内市場、それ以下のものを輸出用に廻すのが有利であろう。

輸出量については、ヨーロッパ市場では、イスラエル、アフリカとの機会もあり、実際に輸出を試みないと予測がたりにくい。北米市場がもし開発されてくると相当量の輸出が可能となってくる。

現在の問題点は、輸送料金にある。マモン輸出は航空便で行なわれるが、

現在の段階では、ベレンから国内線でレンフェに空送し、レンフェから国際線でヨーロッパ方面に転送されることになり、かなり料金が高くなっている。これが仮りにベレンから国際線直行便が利用出来るようになると極めて有利になり、市場での競争にも勝てる一歩手となるので、将来輸出が軌道に乗り出せば、この点の交渉も必要となってくるであろう。

いまのところマモン輸出に関しては、規格や法令はなく、輸入国の法令注文に従って行なえば問題ないとされている。

